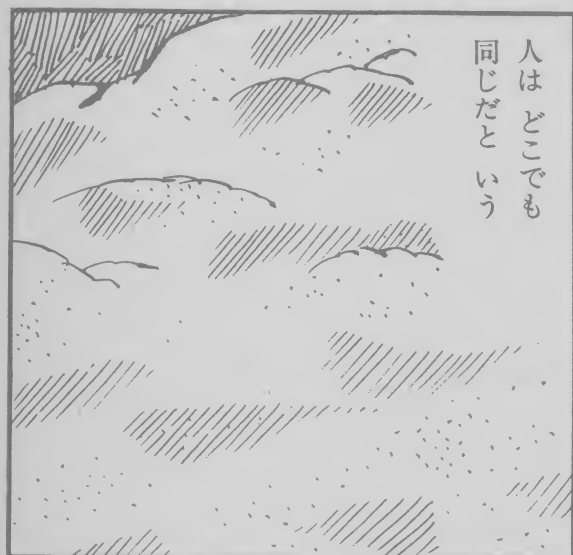
くらい岩が見えてきた
作・関口シュン

さあ、誰か

洗いざらい
見ていって
くれないか

おれの目の中に
はいってきて

太陽がつよく輝く
こんな日には
何もかもが
そこへ
引きあげられる
けど

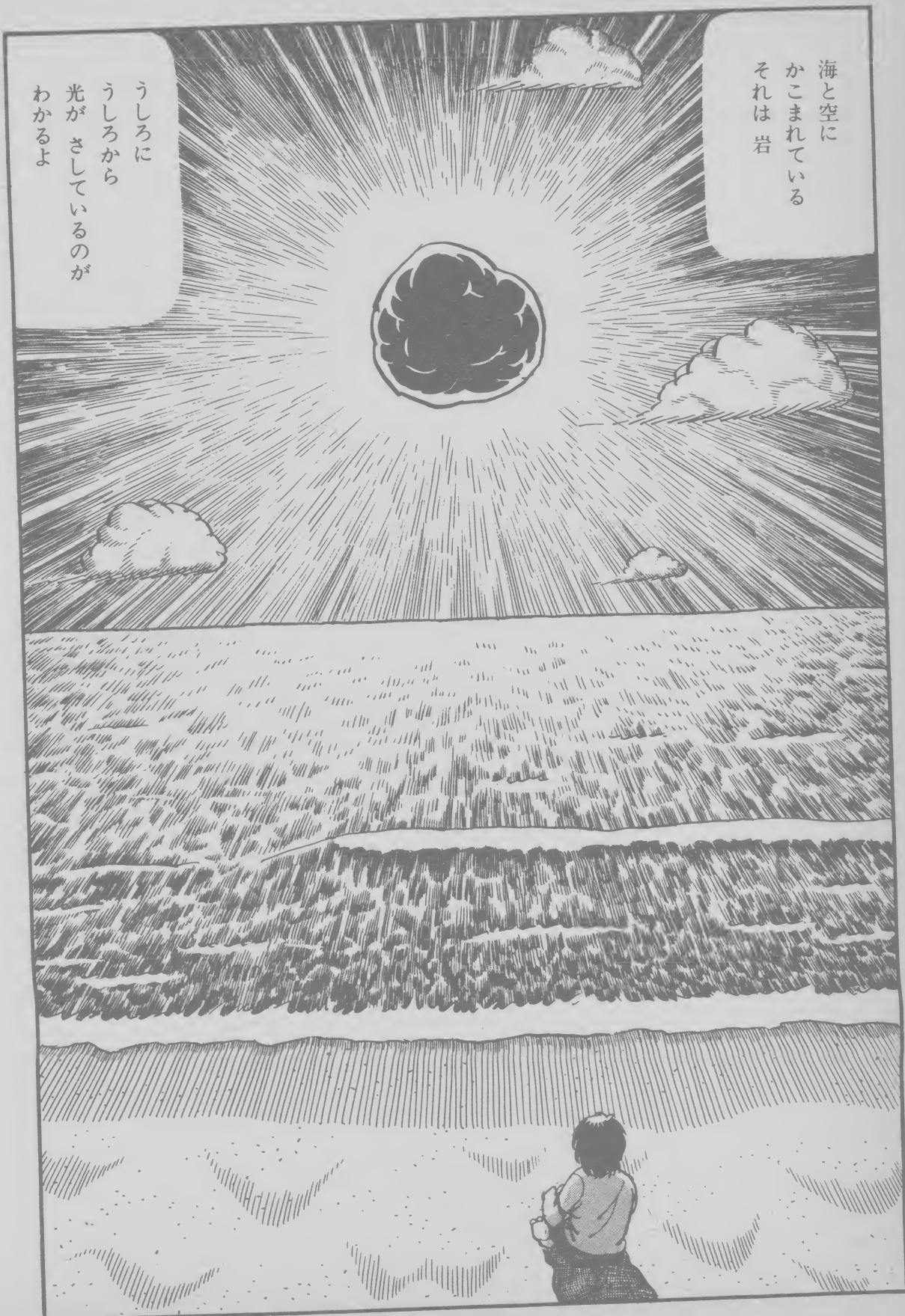
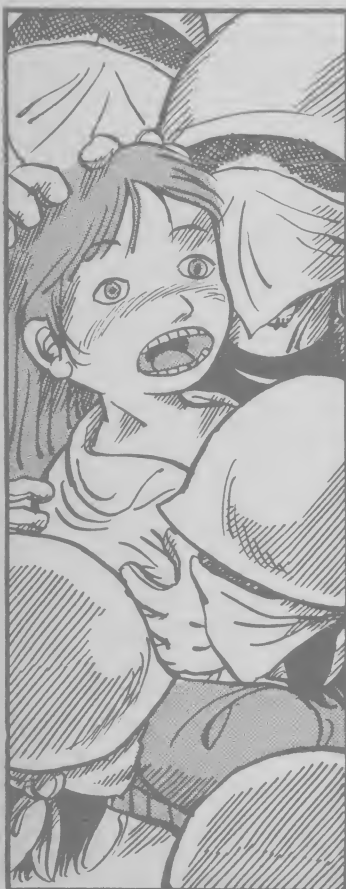
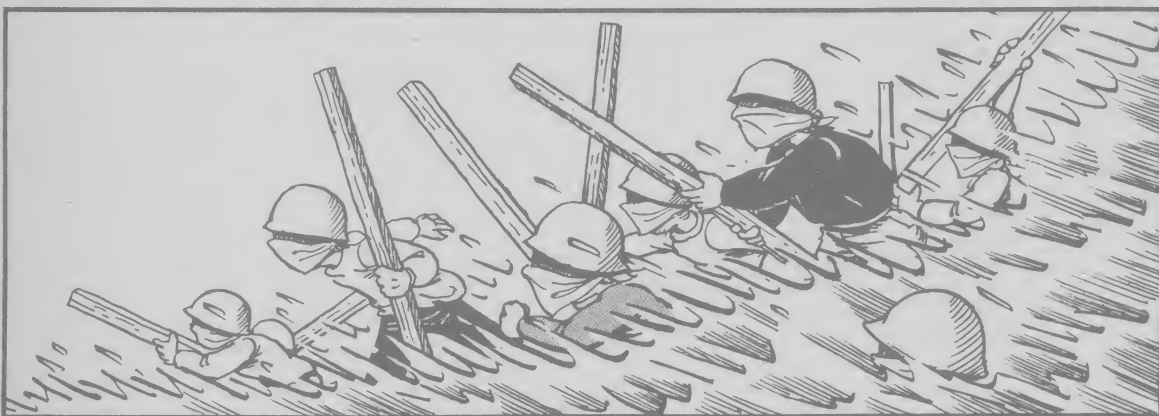
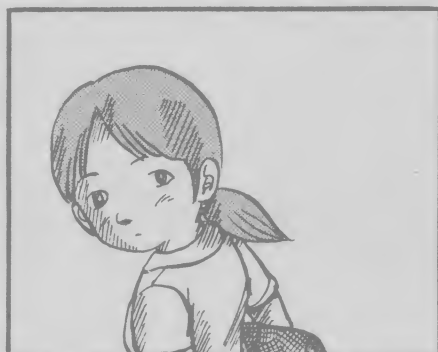
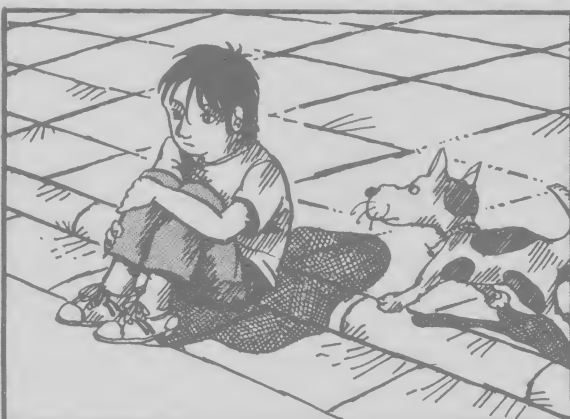
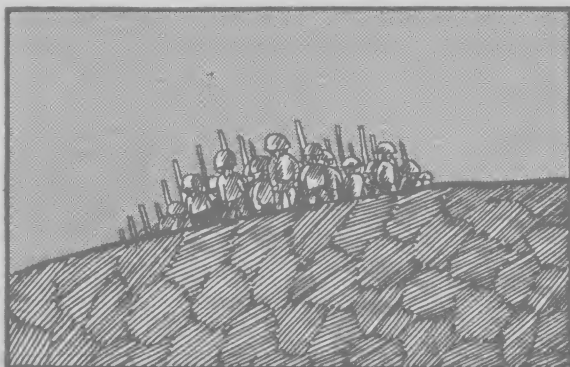
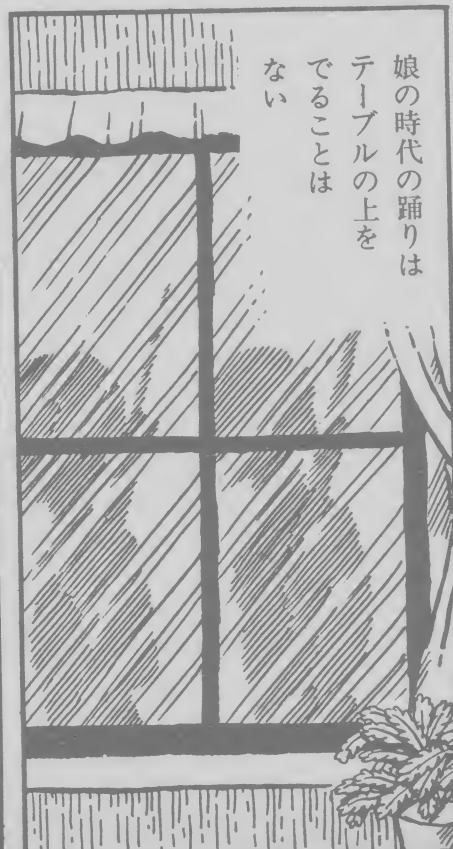
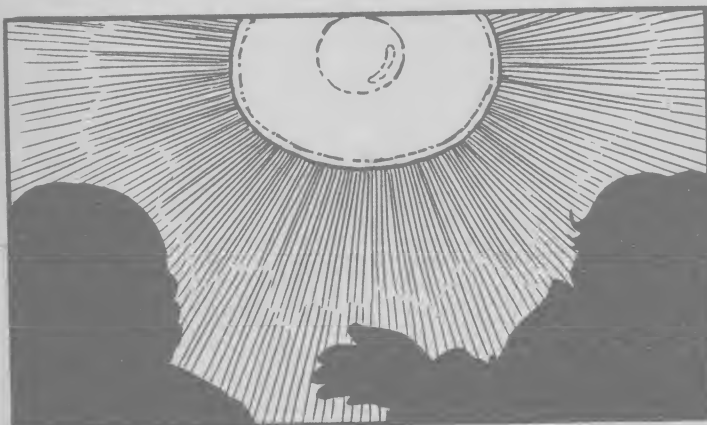
おれの気持ちは
沈みこんじ
まって
どこ行く
あてもない

人は行く場所を
失っている という

人は どこでも
同じだと いう

おれは
海辺に
すわりこんで
太陽を
みている

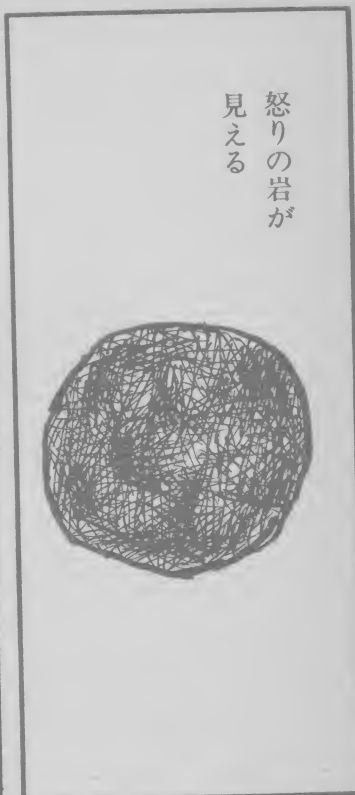
海と空に
かこまれている
それは 岩
うしろに
うしろから
光が さしているのが
わかるよ

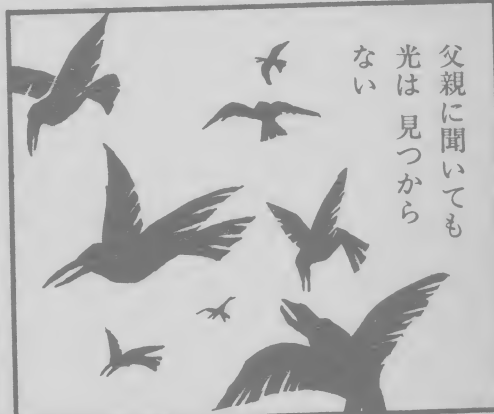
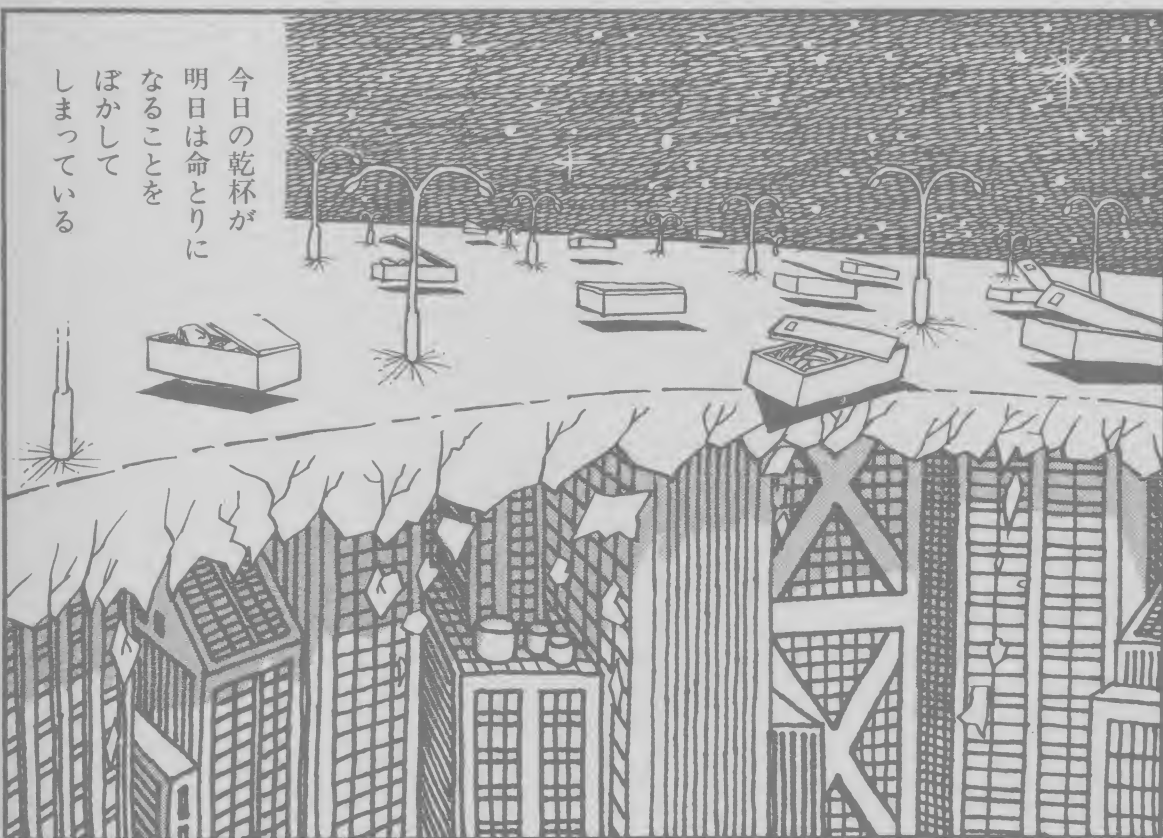
かつて闘争の日に
彼らは 娘を
抱いた

そして
なぐさめきれぬ
うちに
娘は 放り
出された
ああ
誰が 娘を
そんな風に
あつかうことを
望んだのか
父親は娘を
所有するため
テーブルいっぱい
の 食事を
つくらせて
いる

父親は 妻と
共同戦線をはった
そして、黙認、と
誓い合うのだが

娘の時代の踊りは
テーブルの上を
でることは
ない

つまらぬ嫉妬
から 来る
二十億光年の
星への
願いでは
なく

怒りの岩が
見える

この時代に生まれた
恥づかしさが
とりかこんでいる

父親に聞いても
光は 見つから
ない

126

新しいということが
すべて そこで
古くなっていくことは
すでに 聞かれた

今日の乾杯が
明日は命とりに
なることを
ぼかして
しまっている

乾杯でなく
完敗を
飲み

明日が
ただの一日で
なく
BABY

今日が
終った日の
ようで

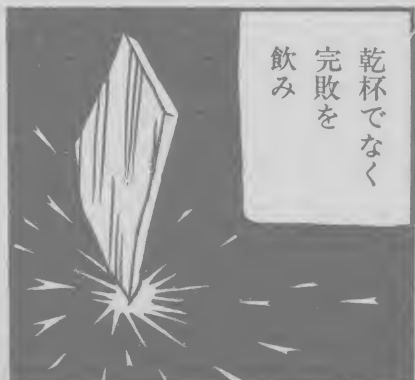
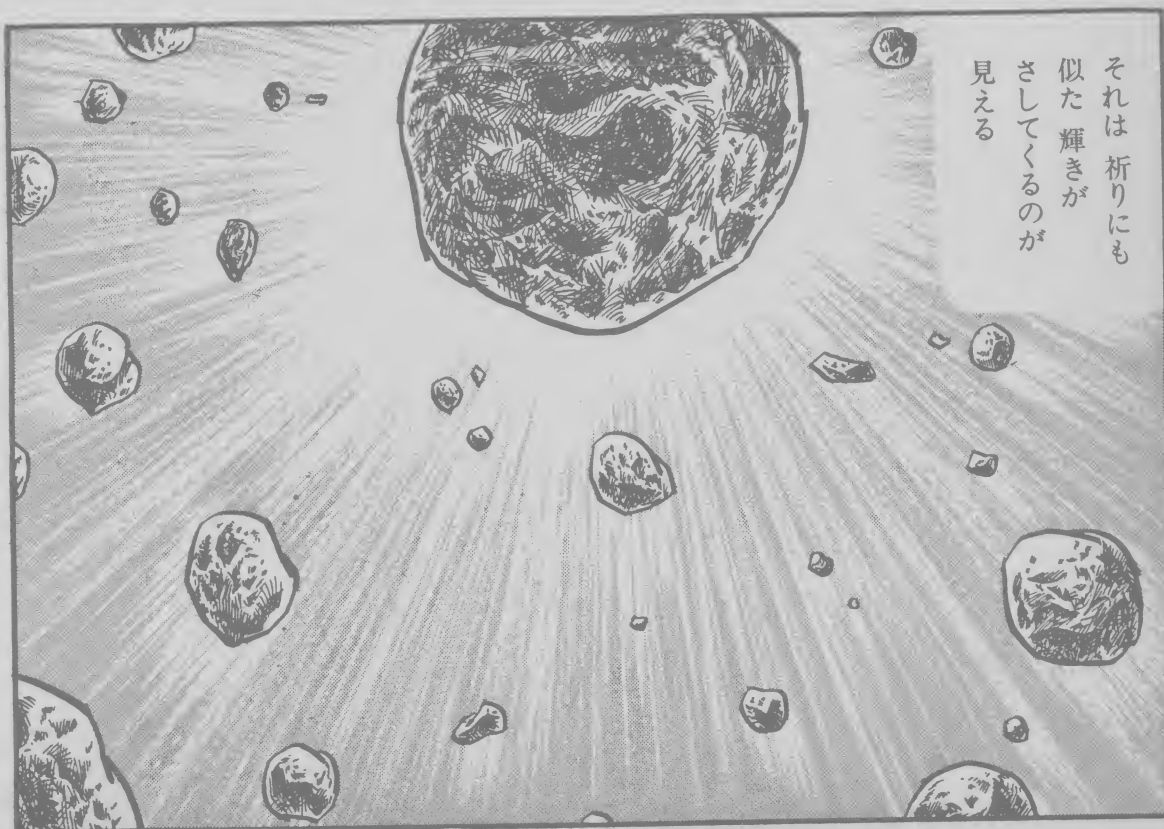
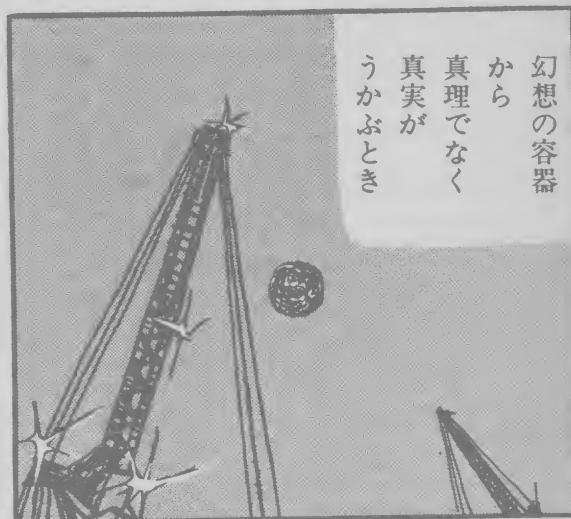
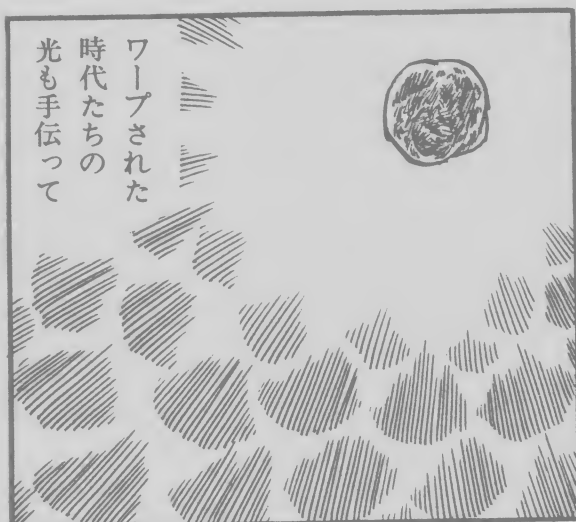
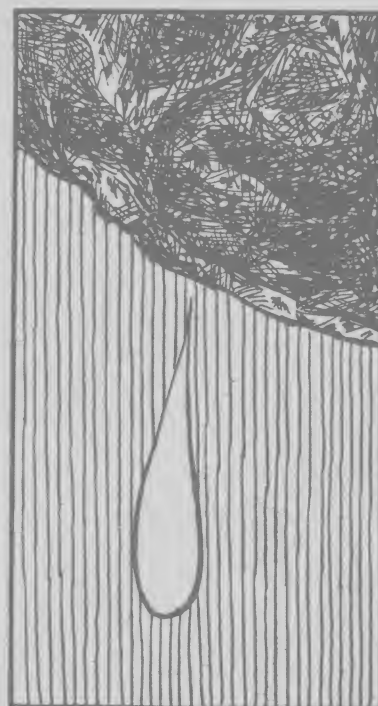
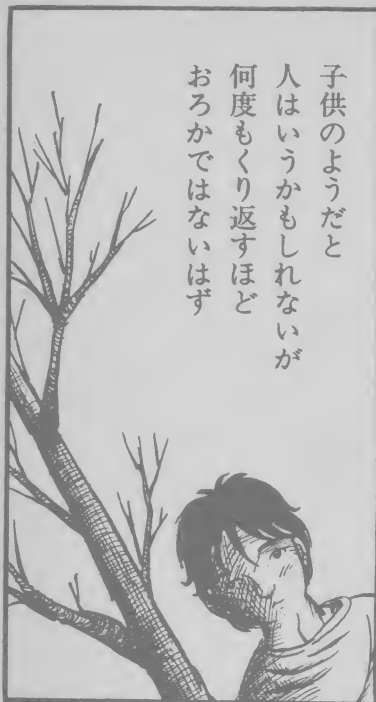
幻想の容器
から
真理でなく
真実が
うかぶとき

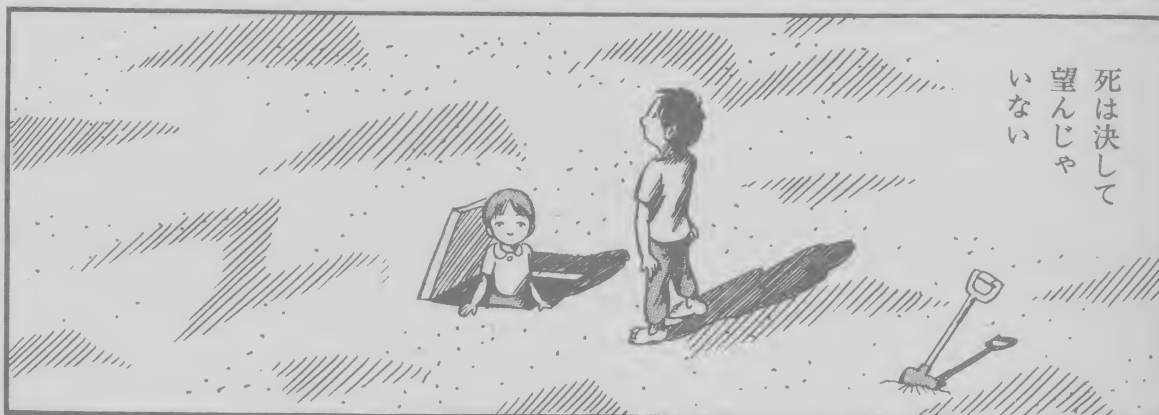
ワープされた
時代たちの
光も手伝って

それは 祈りにも
似た 輝きが
さしてくるのが
見える

子供のようだと
人はいうかもしれないが
何度もくり返すほど
おろかではないはず

この道は
いつか
走り来た
道だろうか？

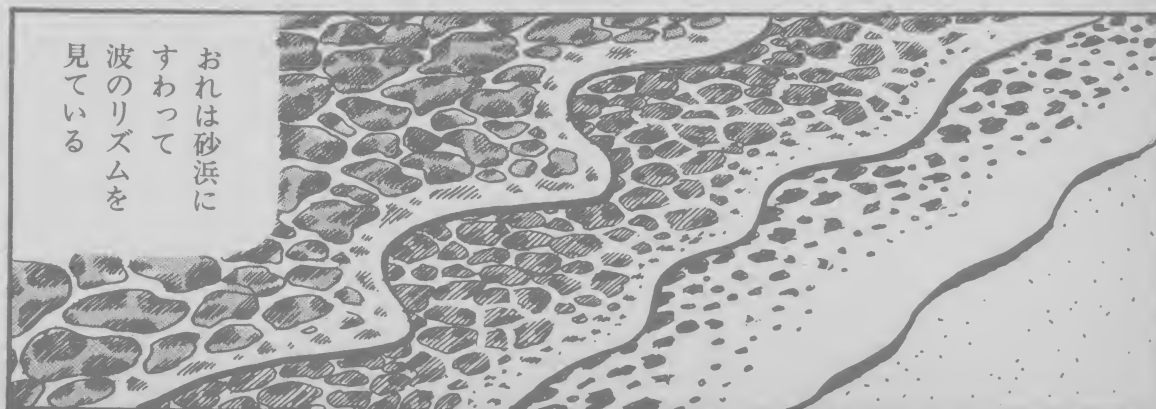
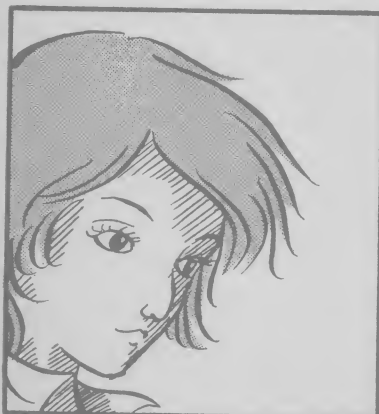
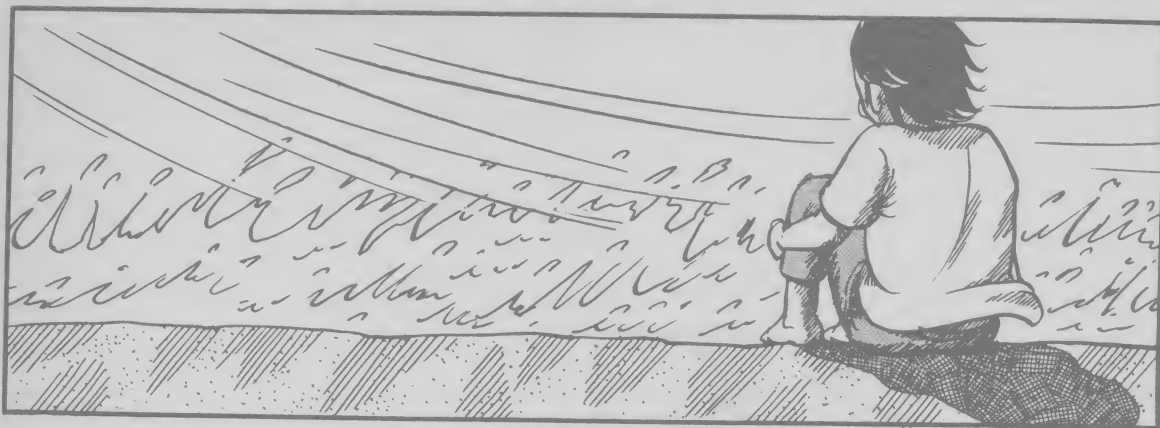
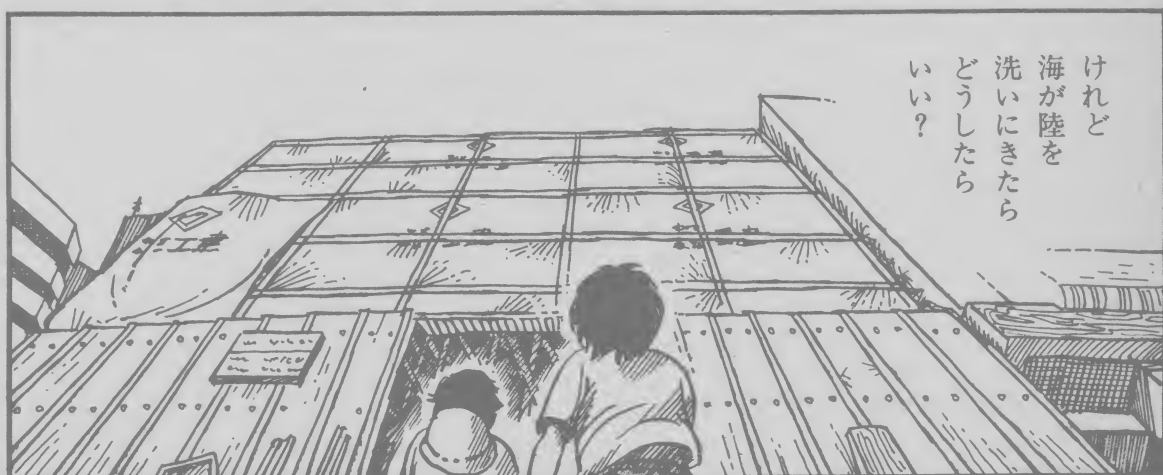
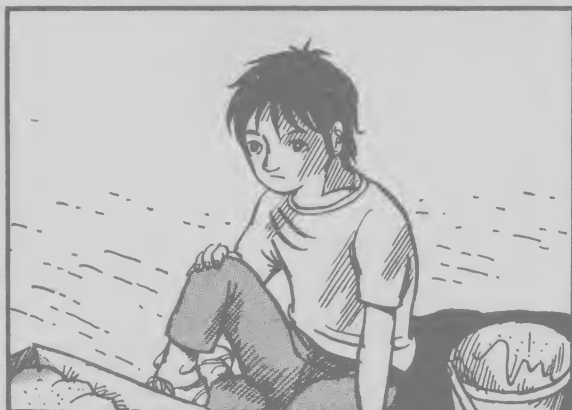
この道の
行く着く果ては
アルマゲドン？

待つべきか、
行くべきか、

娘にわかるのは
つらいという
ことで

死は決して
望んじゃ
いない

おれは砂浜に
すわって
波のリズムを
見ている

彼女は
岩場でカニを
見ている

すべてが このままで
いてほしいと
陸をかわい
がっている

けれど
海が陸を
洗いにきたら
どうしたら
いい？

やさしさの銃弾が
孤独を射ちに
きたら
どうしたら
いい？

これが あんたの
夢でなく
ほんとだったら
どうしたら
いい？

SHUN '79.7